様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１７６０１

研究課題名（和文）村上専精の基礎的研究

研究課題名（英文）A Preliminary Study on Murakami Sensho

研究代表者
ＫＬＡＵＴＡＵ　Ｏｒｉｏｎ（Klautau, Orion）

東北大学・国際文化研究科・准教授

研究者番号：１０６３４９６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東京（帝国）大学における印度哲学講座の初代教授で、「大乗仏教」は歴史的ブッダたる釈迦の「金口」から発せられた直説ではないことをアカデミズム仏教学の立場から立証した村上専精（1851-1927）の思想と行動を、通史的に描いたものである。1880年代後半から示されていく専精の思想のコンテキストを示し、道徳・歴史・修養・宗学の諸側面を軸とした彼の思想と行動は近代的な言説としての「日本仏教」の形成に如何なる貢献をもたらしたのかなど明らかにした。なお40年間にわたる村上専精の執筆活動をまとめた総合目録の作成の他、研究入門の機能を果たしうる著作も完成し、2020年度内に刊行される予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、村上専精という人物を通して、近代日本の仏教者は如何に「宗教」という新概念に自己を当てはめようとしたのかについて、さらに明らかにすることにある。専精は「仏教」の再定義に積極的に取り組んだキーパーソンであるが、彼の事績を総合的に捉えるものはなく、本研究はその初の試みとなった。成果として『村上専精と日本近代仏教』（法藏館、2021年）の他、代表者が編者をつとめた『仏教統一論』の部分的な英訳もハワイ大学出版会から刊行される予定である。日英両語での具体的な成果を発表し、専精を通して日本仏教史研究への新視座をもたらしたのは、本研究における大きな社会的意義であると言えよう。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to understand the historical development of the ideas of Murakami Sensho (1851-1929), first full professor of the "Indian Philosophy" department at Tokyo (Imperial) University, and famous for having asserted, from the academic perspective of Buddhist Studies, that the Mahayana had not been spoken by the "golden mouth" of Shakyamuni, the historical Buddha. Besides shedding further light on the context of his intellectual formation, I also have, from the perspective of topics such as morality, history, self-cultivation and doctrinal studies, managed to depict Murakami's contributions to the development of "Japanese Buddhism" as a modern discourse. I have produced a comprehensive catalogue of Murakami Sensho's works (which encompass forty years of academic and religious activities), and completed an edited volume which will serve as an introduction to his life and thought.

研究分野：近代日本仏教史

キーワード：近代仏教　村上専精　宗教概念　女子教育　修養　アカデミズム仏教学　Modern Buddhism　Murakami Sensho

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

本研究は、代表者がこれまで行ってきた日本仏教の歴史叙述思想研究の成果――例えば『近代日本思想としての仏教史学』（法藏館、2012 年）及び『戦後歴史学と日本仏教』（法藏館、2016 年）など――を踏まえつつ、近代を代表する仏教思想家の一人、村上専精（1851-1929）に焦点を当て、日本における「仏教」の概念史的展開を再検討しようとするものである。

「仏教」という言葉は現在、漢字文化圏において日常用語の位置を占めているが、近世以前は、今に比して極めて限定的な用いられ方であった。熟語としては存在したものの、現在の我々がいう「Buddhism」ではもちろんなく、「仏」の「おしえ」という教理的な意味で把握されていたのである。それに対して、「仏法」や「仏道」の方が広義の言葉として用いられ、言語的な表現である教理（belief）の側面に加え、非言語的な行為（practice）をも含むタームであった。しかし幕末期から、より積極的に「西洋」の学知を導入していく日本の知識層は、欧州の枠組において成立した教理重視の「religion」という言説に出会い、その言葉は如何にして表現すべきか、ということが、仏教界にとって大きな課題のひとつとなった。

例えば、それぞれが全く異なる経典をかかげ、様々な宗派に分かれている「仏教」の場合、その最も根本的な経典、すなわち『聖書』に対峙しうるような教理体系とは、一体いかなるものなのか。そして直接の経典的根拠をもたない仏教実践とは、如何に捉えられるべきなのか。これらの問いは、それまで実践的な側面を重視してきた「仏道」を「仏教」に変遷させ、教理を中心とする「宗教」へと展開させた。しかし、その「教理」の探求と同時に、それと表裏一体のものとして、それまでに正面から取り上げられることのなかった「歴史」の問題も浮上することとなった。明治期において、近代的な梵語学が導入されると、日本列島に成立したほとんどの宗門がその一環である「大乗」は「宗教」としての「仏教」の開祖である釈尊に還元しうるものではないことが、ひとつの常識となっていった。そのコンテキストで大乗は「史実」でなくとも、仏陀が伝えようとした「真理」の歴史的展開であると示すような思想的営為もみられるようになり、その最も有名な事例は恐らく、本研究の中心人物として取り上げられる村上専精によるものである。

専精はまさに、以上に概観したプロセスを生きる形で、幕末維新期において教育を受け、明治初中期以降、「仏教」の再定義に最も積極的に取り組んでいく思想家の一人である。丹波国・真宗大谷派教覚寺に生まれた彼は、1874 年に京都東本願寺の高倉学寮に入学するも数ヶ月後退寮する。三河の入覚寺住職の養子となり、1875 年に住職となるが、1880 年に京都へ戻り、本願寺教師教校に入る。1887 年に上京し、哲学館などの講師をつとめ、1890 年に帝国大学の教員となる。1901 年に「大乗非仏説」を主張したことへの反響のために僧籍を離れるが、後に復籍している。1917 年に安田善次郎（1838-1921）の寄付によって、東京帝国大学に印度哲学講座が創設され、専精がその初代教授となる。1923 年の退官後、大谷大学学長などを務め、1929 年に生涯を終える。

専精は以上のように、「大乗非仏説」を主張したことで、近代宗教史の枠組において語られる人物である。しかし、その前後の活動をめぐる研究は、これまで見られなかった。つまり、芹川博通「仏教統一論――村上専精」（1989 年）、末木文美士「講壇仏教学の成立――村上専精」（2000 年）、ミシェル・モール「村上専精――仏教の本質的統一を求めて」（2005 年）のような成果に窺えるように、これまでの専精研究は世紀転換期におけるその統一事業に集中しており、1890 年代前後における彼の道徳論や、日露戦争以降のその修養思想や女子教育論、そして晩年の宗祖論などに関する詳細検討は皆無に等し

い。代表者は今回の研究を通して、かかる研究史上の空白を埋めつつ専精の思想展開を通史的に描き、それを近代仏教史研究の枠組で位置づけるように努めた。

２．研究の目的

以上を踏まえて、本研究は近代日本の枠組で「仏教」がひとつの「宗教」として如何に成立し、定着していったのかを考察するものである。その具体的な方法として、本研究では明治中期から昭和初期にいたるまでの時期において、最も積極的に活動した仏教者の一人である村上専精の思想と行動に焦点を当てる。本研究では、新資料の発掘も含め、専精の思想的展開を通史的に描き、それを通して近代日本仏教史の物語の上書きを試みる。

３．研究の方法

本研究は、村上専精が 40 年間にわたって発表した作品（著書・論説）の総合目録を作成し、その業績の通史的な理解を試みる。すなわち彼の思想を四期――a）初期から 1893 年まで、b）1890 年代中葉から日露戦争まで、c）1905 年頃から 1910 年代の後半まで、d）第一次世界大戦の終結から 1929 年まで――に区分し、その展開を考察する。その成果を踏まえ、近代の仏教思想家を扱う他の研究者を招待したワークショップを開き、日本のモダニティにおける専精の位置を考える。

４．研究成果

（ａ）思想的コンテキストとしての幕末維新期

研究を進展させる際、村上専精の初期思想を考えるうえで、キリスト教への眼差しは鍵のひとつとなることに気づき、その課題に取り組み、新たな成果を提示した。1851 年生まれの専精は幕末維新期において、江戸宗学の枠組で教育を受け、その土台は 1890 年代に至るまで強く機能していく。具体的に、彼を取り巻く大谷派の思想的位相を確認するため、彼の師の一人でもある樋口龍温（1800-1885）が構想した護法教育について検討し、若き専精が経験したコンテキストの理解を深めた。大谷派は、それまでとは異なる形での、一種のテキスト主義を踏まえた「耶蘇教」へのアプローチをすすめて、その影響は専精のみならず、小栗栖香頂（1831－1905）や南条文雄（1849-1927）などにもみられる。

（ｂ）近代日本仏教と大乗論

村上専精の「大乗仏説批判」を位置づけるべく、1880 年代から 90 年代にいたるまでの日本における「大乗仏教」への眼差しの変遷も描くことができた。欧州東洋学において「非仏説」はともかく、本来の仏教の堕落形態とも言われた「Mahayana Buddhism」の位置づけは、日本の仏教者のアイデンティティーと深くかかわる問題のため、中心課題のひとつとなった。キリスト者の髙橋吾郎（1856-1935）による『仏道新論』（1880 年）から、（東京）帝国大学における専精の前任たる同じく大谷派の吉谷覚寿（1843-1914）の『仏教大旨』（1886 年）に至るまで、「大乗」を正統化する上でのキーワードは「仏説」というより、「涅槃」であったことがわかり、専精はその延長線で自身の「統一論」を試みたことも確認できた。

（ｃ）晩年における村上専精の思想的展開

仏教の統一事業で挫折し、結果として僧籍も離れる専精は、日露戦争を境目として時勢に順応し、『教理と実践』（1907 年）、『女性訓』（1908 年）、『修養論――通俗』(1911 年)にみられるように、「修養」について積極的に論じていくことになる。全く同時期から女子教育に携わっていくことも偶然の一致ではなく、今まで検討されることが稀であった専精のこの時期の活動に焦点を当て、それを全体的に理解しようとした。課題申請の当初、仮説として別々の展開として考えていた専精のこの時期の修養論と最晩年の教祖論は、実は「人格」の概念を軸に連絡しており、これをもって、専精の全体像に近づく作業を仕上げたといえる。

以上の個別課題をめぐる新知識の獲得により、代表者が以前から発表してきた彼のアカデミズム仏教学にまつわる成果に加え、英語モノグラフの土台となる研究を完成した。さらに、著作目録も含む論集『村上専精と日本近代仏教』の出版も決まり、代表者が編者をつとめる『Buddhism and Modernity: Sources from Nineteenth-Century Japan』（ハワイ大学出版会）に村上専精の畢生の大著ともいうべき『仏教統一論・大綱論』（1901 年）の部分的英訳を収録し、その業績はこれから日本の枠を超えて、広く読まれていくことになろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　5件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 クラウタウ、オリオン	４．巻 50
２．論文標題 近世後期の仏教と自他認識の転回	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本思想史学	６．最初と最後の頁 12-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 クラウタウ、オリオン	４．巻 単行本
２．論文標題 日本宗教史学における廃仏毀釈の位相	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『カミとホトケの幕末維新』（岩田真美・桐原健真共編、法藏館）	６．最初と最後の頁 51-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 クラウタウ、オリオン	４．巻 41
２．論文標題 「宗教」概念を考える――近代日本における「宗教」としての仏教の生成	５．発行年 2019年
３．雑誌名 現代と親鸞	６．最初と最後の頁 191-231
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Klautau, Orion；池田智文；林淳；桐原健真	４．巻 51
２．論文標題 日本思想史としての神仏分離・廃仏毀釈	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本思想史学	６．最初と最後の頁 42-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Klautau, Orion	4．巻 46
2．論文標題 Review of "Making History Matter: Kuroita Katsumi and the Construction of Imperial Japan," by Lisa Yoshikawa	5．発行年 2020年
3．雑誌名 The Journal of Japanese Studies	6．最初と最後の頁 178-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1353/jjs.2020.0015	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 クラウタウ、オリオン	4．巻 単行本
2．論文標題 幕末期における宗教言説の展開――僧・龍温の自他認識をめぐって	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『日本思想史学会創立五〇周年記念論集』（前田勉・苅部直編、ぺりかん社）	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 クラウタウ、オリオン	4．巻 単行本
2．論文標題 村上専精という課題	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『村上専精と日本近代仏教』（オリオン・クラウタウ編、法藏館）	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 クラウタウ、オリオン	4．巻 単行本
2．論文標題 修養としての仏教――村上専精の教育論・研究序説	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『村上専精と日本近代仏教』（オリオン・クラウタウ編、法藏館）	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Klautau, Orion	4．巻 単行本
2．論文標題 On Protecting the Nation through Buddhism (1856), by Gessho	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Buddhism and Modernity: Sources from Nineteenth-Century Japan (ed. Orion Klautau and Hans Martin Kraemer, Honolulu: University of Hawai'i Press)	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Klautau, Orion	4．巻 単行本
2．論文標題 "On Civilization" (1876), by Ouchi Seiran	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Buddhism and Modernity: Sources from Nineteenth-Century Japan (ed. Orion Klautau and Hans Martin Kraemer, Honolulu: University of Hawai'i Press)	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 クラウタウ、オリオン	4．巻 第５巻
2．論文標題 戦後日本の仏教学――国体論から国際論へ（コラム）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 シリーズ『近代日本宗教史』（第5巻「敗戦から高度成長へ」、島薗進・末木文美士・大谷栄一・西村明共編、春秋社）	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　9件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 クラウタウ、オリオン
2．発表標題 日本仏教――近世から近代へ
3．学会等名 真宗大谷派教学研究所（招待講演）
4．発表年 2017年

１．発表者名 Klautau, Orion
２．発表標題 By Pen and Sword: Varieties of Goho Strategies in Bakumatsu Japan
３．学会等名 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 クラウタウ、オリオン
２．発表標題 近代仏教と修養――村上専精の教育論を中心として
３．学会等名 日本宗教学会・第76回学術大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Klautau, Orion
２．発表標題 Guiding a Great Vehicle: The Mahayana and Buddhist Studies in Meiji Japan
３．学会等名 International Workshop "Mahayana in Europe: Japanese Buddhists and Their Contribution to Academic Knowledge on Buddhism in Nineteenth-Century Europe," University of Heidelberg (Germany)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 クラウタウ、オリオン
２．発表標題 近世後期の仏教と自他認識の転回
３．学会等名 日本思想史学会創立50周年記念シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Klautau, Orion
２．発表標題 Buddhism in Modern Japan: Networks and Scholarship
３．学会等名 Oslo-Tohoku International Workshop "Buddhism in Japanese History: New Perspectives," University of Oslo (Norway)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 クラウタウ、オリオン
２．発表標題 明治期の仏教学と大乗論
３．学会等名 日本近代仏教史研究会・2018年度大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 クラウタウ、オリオン
２．発表標題 「宗教」概念を考える―近代日本における「宗教」としての仏教の生成
３．学会等名 第19回「親鸞仏教センター研究交流サロン」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 クラウタウ、オリオン
２．発表標題 世紀転換期の村上専精における宗教と倫理の領域
３．学会等名 日本宗教学会 第77回学術大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 クラウタウ、オリオン
２．発表標題 廃仏毀釈の近代的位相
３．学会等名 日本思想史学会・2018年度研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 クラウタウ、オリオン
２．発表標題 明治期における大乗仏説と涅槃論
３．学会等名 国際ワークショップ「日本仏教と西洋／世界の19世紀」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 クラウタウ、オリオン
２．発表標題 近代仏教と日本思想の語り方
３．学会等名 日本近代仏教史研究会・2019年度大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Klautau, Orion
２．発表標題 The Predicament of the Non-Modern: Murakami Sensho and the Essence of Buddhism in Meiji Japan
３．学会等名 17th Annual Conference of the European Association for the Study of Religions (EASR)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 クラウタウ、オリオン
２．発表標題 原坦山と近代日本仏教
３．学会等名 シンポジウム「駒澤大学における「禅と心」探究の歴史（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Klautau, Orion
２．発表標題 Religion and Ethics in Early Twentieth-Century Japan: Murakami Sensho and Buddhist Modernity
３．学会等名 The 2nd Indonesia-Japan Scientific Forum/International Symposium on Japanese Studies（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 クラウタウ、オリオン
２．発表標題 近代日本仏教史上の村上専精
３．学会等名 大正大学綜合仏教研究所公開講座（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 クラウタウ、オリオン編	４．発行年 2021年
２．出版社 法藏館	５．総ページ数 印刷中
３．書名 村上専精と日本近代仏教	

１．著者名 Klautau, Orion & Hans Martin Kraemer, eds.	４．発行年 2021年
２．出版社 University of Hawai'i Press	５．総ページ数 印刷中
３．書名 Buddhism and Modernity: Sources from Nineteenth-Century Japan	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考